

天界

第五號(第一卷)

大正十年
三月號

星座と星名について

理學士 山本 一 清

天全體を若干の部分に分けて、之れを星座と唱へる。星座はすいぶん大昔から人が發明したもので西曆紀元前後即ち今から約二千年前の頃にギリシヤでは既に四十八座が數へられてゐた。之れは全部トレミーのアルマゲストに載つてゐる。中世に至つて天體觀測が盛んになり、又南の方まで天の研究が擴張せられると共に新しい星座が澤山作られた。ところが遂には此の新しい星座が餘り多く作られると共に、人々によつて同じ星を違つた星座中に入れたり又勝手な星座を作つたり、よほど不統一、無秩序になつて、人を迷はしたが、其の後、此等の多くの星座の中から漸次淘汰が行はれて、現今は約そ九十座が主として用ひられてゐる。此の九十座の名稱は別

表の通り。

一體、この星座が如何して出來たかといふのは、天文學上頗る興味深い問題である。吾々の眼は星の一つ／＼を眺めただけでは其の星の實體の大小や遠近が區別出來るものでない。言はゞ總ての星は何の區別も無く同一の距離にあつて、恰も大地を掩ふ一の圓天井の内面に羅列してゐるやうに見わる。此等の星は、見たところ運行が頗る簡單で、つまり日週運動と年週運動とがあるばかり、星と星相互の距離は永久不變である。幽玄なる此等の星の正體が今日の如く物理的化學的に解せられるとは昔の人が夢にだも考へなかつたところであつた。だから見わるまゝの大星小星を、隣り同志のものだけ一かたまりづゝに分けて置けば、彼等の實用のためには充分であつたのである。星座が種々の動物や人名で呼ばれてゐるのには、皆何がしかの理由が在つたのであらうが、今は多く其の理由は不明である。しかし星座に對する第一印象は昔の人も今の人も皆或る程度までは共通してゐるので、今の人が星に親しむ場合に、星座の名は充分に其の趣味を満足せしめるものであ

星座一覽表 (山本一清編)

番 號	(ラテン名)	邦 譯	星 座	肉 眼	南 中 期	番 號	(ラテン名)	邦 譯	星 座	肉 眼	南 中 期
北 一	Andromeda	アンドロメダ	三 七	十月(天頂)	七 五	Circinus	コムパス	一 二	二月(南)	四	二月(南)
七 三	Antlia	ポンプ	三	四月(南天)	六 三	Columba	鳩	一 八	五月(天頂)		五月(天頂)
四 九	Apus	風鳥	八	• 十月	六 二	Coma	髪	一 八	八月(南天)		八月(南天)
(一 一)	Aquarius	水瓶	三 六	十月	南 七	Corona Australe	南冠	一 五	七月(天頂)		七月(天頂)
北 二	Aquila	鷲	二 八	九月初	北 七	Corona Borealis	北冠	一 五	五月(南天)		五月(南天)
南 一	Ara	祭壇	八	八月	南 八	Coryus	鳥	八	五月(南天)		五月(南天)
南 二	Argo	アルゴ船	一 二 五	四月	南 九	Crater	コップ	一 五	四月		四月
(一 一)	Aries	牡羊	一 五	二月	六 四	Cruix	十字架	九	五月(南天)		五月(南天)
北 三	Auriga	馭者	三 五	二月(天頂)	北 八	Cygnus	白鳥	六 一	九月(天頂)		九月(天頂)
北 四	Bootes	牧夫	三 六	六月末(天頂)	北 九	Delphinus	海豚	八	十月		十月
七 四	Caesum	彫刻具	四	二月(南天)	五 一	Dorado	旗魚	九	一月(南天)		一月(南天)
六 二	Canis Major	大犬	二 二	二月(北天)	北 一 〇	Draco	龍	五 二	七月頃		七月頃
(四)	Cancer	蟹	一 五	四月(天頂)	北 一 一	Equeus	小馬	四	十月		十月
六 六	Canes Venatici	獵犬	一 一	五月(天頂)	南 一 〇	Eridanus	エリダン河	五 六	一月		一月
南 三	Canis Minor	小犬	四 一	三月	七 六	Fornax	爐	五	十二月(南天)		十二月(南天)
南 四	Capricornus	山羊	八	三月	(三)	Gemini	双子	三 三	三月		三月
(一 〇)	Carina	龍骨	二 一	十月(南天)	五 二	Grus	鶴	一 四	十月(南天)		十月(南天)
* 北 五	Cassiopeia	カシオペア	三 四	三月(南天)	北 一 二	Hercules	ヘルクレス	四 九	七月		七月
南 五	Centaurus	セントウルス	三 八	十二月	七 七	Horologium	時計	五	一月(南天)		一月(南天)
北 六	Cepheus	セフエウス	五 六	五月(南天)	南 一 一	Hydra	海蛇	四 〇	四月(南天)		四月(南天)
南 六	Cetus	鯨	二 七	十月(北天)	五 三	Hydrus	小海蛇	八	• 四月(南天)		• 四月(南天)
五 〇	Chamaeleon	カメレオン	三 七	十二月(南天)	六 七	Indus	印度人	八	十月(南天)		十月(南天)
						Lacerta	蜥蜴	一 六	十月		十月

番 號	(學 ラテン名)	邦 譯	星 肉 數 眼	南 夕 中 期 暮	番 號	(學 ラテン名)	邦 譯	星 肉 數 眼	南 夕 中 期 暮
(五)	Leo (Major)	獅子	三二	五月	南一五	Pisces Austrinus	南魚	一〇	十一月(南天)
六八	Leo Minor	小獅子	八	五月(天頂)	* Pupp's	鱸	五三	三月(南天)	
南一二	Lepus	兎	一九	二月(南天)	* Pyxis	羅針盤	四		
(七)	Libra	天秤	二八	六月	八三	Retiula	レナクル	七	
南一三	Lu ts	狼	三二	六月(南天)	北一七	Sagitta	矢	六	
六九	Lynx	山猫	一七	四月(天頂)	(九)	Sagittarius	射手	四八	九月
北一三	Lyra	琴	一八	八月(天頂)	(八)	Scorpio	蝎	三二	八月(南天)
*	Malus	櫓	六	四月(南天)	八四	Scorpior	彫刻家	一一	七月(南天)
七九	Menae	テーブル山	二	十月(南天)	七〇	Scutum	楯	六	十二月(南天)
七八	Microscopium	顯微鏡	四	三月	北一八	Serpens	蛇	二五	九月
六五	Mon ceros	一角獸	二七	七月(南天)	七一	Sextans	六分儀	五	七月
五五	Musca	蠅	一一	七月	(二)	Taurus	牡牛	五九	四月
八〇	Norma	定規	八	七月(南天)	八五	Telescopium	望遠鏡	六	一月
八一	Ocans	八分儀	五	七月	北一九	Triangulum	三角	五	八月(南天)
北一四	Ophiuchus	蛇遣ひ	四一	二月	六〇	Triangulum Australe	南三角	五	十二月(天頂)
南一四	(Orion)	オリオン	五八	九月(南天)	五九	Tucana	巨嘴鳥	一二	
五六	[avo	孔雀	二一	十一月(天頂)	北二〇	Ursa Major	大熊	四五	五月
北一五	Pegasus	ペガソス	三八	十二月(南天)	北二一	Ursa Minor	小熊	一四	六月(北天)
北一六	Pereus	ペルセウス	四六	十二月(南天)	*	Vela	帆	二八	四月(南天)
五七	Phoenix	鳳凰	一八	二月(南天)	(六)	Virgo	乙女	三八	五月
八二	Pictor	畫架	八	十一月	五八	Volans	飛魚	七	
(一一)	Pices	双魚	三〇	十一月	七二	Vulpeula	狐	一五	九月

る。自分の経験から推し見ても、天文の趣味は半ば以上星座の趣味であるといへる。

大昔しの天文書を見ると、各星座には一々其の名に相當した畫が描いてある。そして其の畫は、たとひ畫く人が違つても畫き方は皆同じ畫であつて、例へば巨人オリオンは常に棍棒を振り上げて頭を左に向けてゐるし、牡牛は亦常に東の方に角を突き出してゐる。そして一々の星は畫中でチャムと一定の場所にあるやうにしてある。例へばレグルスは獅子の胸に、アルデバランは牡牛の右眼に、シリウスは大犬の首環にきまつてゐる。そして星の位置を言ふのに、今ならば經度何度緯度何度と言ふべきところを「獅子の頸にある星」だとか、「牡牛の右眼の星」だとか言つたのである。それで星座は昔の人には現今よりももつと實用的に重要なものであつたので、従つて一々の畫の畫き方も人々の隨意では不可であつたのである。

十七世紀の始め、バイエル (Bayer) がウラノメトリアといふ星圖を出版し、一つ一つの星座の中で、光の最も強い星から、順にアルファ、ベータ、ガン

マと、ギリシャ文字を當てはめた。此の呼び方は今も用ひられる、例へばヴェガは琴座アルファ、北極星は小熊座アルファといふ類である。しかし或る星座には肉眼で見ゆる星が三十も四十もあるの、バイエルはギリシャ文字二十四字が盡きると、其の次にはローマ字 a b c ……を用ひた。之れも勿論其のまゝ今用ひてゐる。

其の後、英國のフラムスチードが約三千個の星の目錄を發表したが、彼れは前のバイエルの符號に御かまひなく、各星座に屬する星を赤經の順に一二三……と數字を當てゝ行つた。此のフラムスチードの星はバイエルの星よりも數が遙かに多いので、今でもバイエルに無くてフラムスチードにある星は、其のフラムスチードの數字で星を呼ぶのである。御丁寧な場合にはバイエル名とフラムスチード數とを並べて呼ぶこともある。例へば

小犬座 第三號 ベータ (3 β Canis Minoris)

といへば第三號はフラムスチード數字、 β はバイエル名である。

近年になつて、益々多くの星を取扱ふやうになつ

たので、とてもバイエルやフラムスティードの方法だけでは追いつかずなり、多くは其の星の登録されてゐる或る星表中の登録順番號で、其の星を呼ぶことになつてゐる。例へば

グルームブリヂ

一八三〇

といへば、之れはグルームブリヂが發表した星表の第一八三〇番目の星といふ意味である。だから此の場合には星座の名を呼ばない。

現今用ひられる星座は別表に並べた九十座である表の第一段は今便宜上星座につけた番號で、凡例を擧げると、

先づトレミー (Ptolemy) が紀元一四五年其の著アルマゲストに擧げた四十八座は左の三種類に分けてある、即ち例へば

(七) とは黃道に沿ふた動物園十二座の第七番星座

北三 とは黃道以北の星座第三號

南八 とは黃道以南の星座第八號

の意味である。其の他 (即ち第四十九座以後) は皆後に發明されたもので、即ち

四九一六〇 はバイエル星座 (一六〇三年)

六一 はテヒヨの星座 (一六一〇年)

六二一六五 はバルチウスの星座 (一六二四年)

六六一七二 はヘベリウスの星座 (一六九〇年)

七三三八五 はラカイユの星座 (一七五二年)

又*印のあるのはアルゴ座を小さく區分した一々の星座である。總計九十座になる。

表の第二段はラテン語の學名之れも正直に書けば長くなるのもある。例へば

Aquila は Aquila et Antonius (鷲とアントニウス)

Argo は Argo Navis (アルゴ船)

Columba は Columba Noctui (ノアの鳩)

Coma は Coma Berenices (ベレニスの頭髮)

Mensa は Mensa (テーブル山)

Volans は Piscis Volans (飛魚)

Scutum は Scutum Sobieski (ソビエスキの楯)

Fornax は Fornax Chemica (化學爐)

と言ふべきだが、普通には簡單なまゝで通つてゐるから、表の中には略した。

第三段は日本語譯

第四段は其の星座中に肉眼で見える星の數とは書いたが實は五等以上の星數である。

第五段は其の星座の中心が夕暮に子午線を通過する時期で、大體は日本の中央——即ち京阪地方——

で見ねる様子を書いたのである。何月とも書かないで、單に黒點を打つたのは、南極地方の星座で、京都あたりからは永久に見えないのである。

地球上に於て星座と星座との境界は案外明瞭でない場合が多い。之れ畢竟するに星座といふものゝ元の起りが、現今のやうに天全體の面積を適當に區分して天の總ての部分必ず何かの星座中に含めてしまはうといふやうな目的で出来たものでなく、唯、見て都合の好い星を幾つかの團體に見立てたといふのに過ぎなかつたのであるから、言はゞ何の星座にも組入れられず全く等閑視されてゐた星も少くは無かつた。ところがかういふ有様では地球上の事情を言ひ表はすのに頗る不備不完全であるといふところから遂には今のやうに原則として天全體を必ず何かの星座に含むやうに扱はれるに至つたのである。しかるに今日此の星座の境界を如何にして明瞭に決定すべきかについては全く嚴密な方法が無いのである止むなく多くは前述フラムステード星表に記載してある星の分布によつて大體の境界を定めるに止まるそれで人により場合によつて星座の區分法は今も尚

一致しない場合がある。例へば牡牛座へ星は殆んど駁者座との境界線上にあるから、やゝもすれば駁者座が星と呼ぶ人がある——だから此の星を外にして駁者座にはア星ベ星デ星はあるけれどが星は無いことになつてゐる。

しかし又一方から考へると星座が一つの星の位置を言ひ表はす、唯一の方法であつたのは昔しのこと、今は赤經赤緯或は黃經黃緯等でいくらでも精密に之れを言ひ表はすやうになり、又之れが頗る明瞭なのでだんぐ星座の元の用途は減じて來てゐる。そして極めて大ざつばに星の位置を語る場合と、又單に星を好む者の趣味の上から見ねるまゝの星の配列の美觀を言ふ場合にのみ此の星座名を用ひるやうになつてゐる。

星座を初めて學ぶ者にとつて、星の並び方と星座の名とが互ひに何の聯絡も無いのが少くないので頗る難儀する場合が多い。たとへ初めには教科書を見て人物や動物の形などゝ其の星々の位置とを覺ねるにしても唯、ちらばらと並んでゐる形を見てセフェウスやカシオペアや駁者やアンドロメダや、いろ

／＼と態どらしい連想を餘義なくさせられるのは困難なものである。何故あの星々を琴といひ、驚と考へ、牡羊と想像しなければならぬのか。現代の吾人が平素のものゝ考へ方が、昔の人のやうな呑氣な、念の入つた想像生活を煩はしいとし總てを手取り早く要領を得ることにはみ慣らされてゐるのであるから、右に挙げたやうな星座に全く古人の持つてゐた心持を以つて親しむに至るまでには一通りの勉強ではむづかしいかも知れない。

しかしむづかしいといふのも程度問題で、例へば一寸見てむづかしさうであるが、中には案外うまく覺えられるのも無いではない。ペルセウスや牧夫やオリオンや牡牛や双子や大犬などは一度其の形に親しめば豊富な清新な又奇抜な古代ギリシャ人の想像力が目のあたり吾人のそれに共鳴するのを感じて、長く眺めてゐればゐる程去り難い趣きを覺えるものである。大熊や小熊の形もよく味へば中々棄て難い。自分は若い頃夏の天を仰いで蛇座と蛇遣座の形を初めて知つた時、一寸眼には何ものも無いやうな無秩序の中に、實は一定の秩序が整つて天上無比の巨漢

が蜿々と横はる大蛇を繰る壯觀を面と向つて見た時は、想はず快哉を叫んだのを今でも覺えてゐる——其れ以來自分にどつて夏の天に最も親しいものは今尚ほ此の蛇遣座である。

蝸や北冠や獅子や三角などは其の名の通りの形と見るのに誰も異存はあるまい。エリダンや白鳥や鯨などは餘り大きなことは言へないが、しかし決して覺わにくいものではない。唯乙女や射手やヘルクレースと來ては少からず閉口する。況んや近代發案の六分儀だの時計だの望遠鏡だの顯微鏡だのと來ては言語道斷である。

形と名と添はないもので、むしろ全く別の聯想により吾人の腦裏に入り易いものは北斗（大熊座の一部）や三ツ星（オリオンの一部）である。昂（牡牛座中）にも特徴がある。南國の人にとつては十字架など、名其のまゝで御馴染み深いものであらう。

星座に親しむことによつて、いろ／＼實生活の利益を得ることは多いが、特に氣象觀測家のためには之れが頗る重大な結果を起すことがある。即ち夜の空に薄雲が浮いてゐるや否やは是非豫め星座によく親んでゐて、平素御馴染の微星が見えかくれすることによつて、判斷しなければならぬ。此の素養が無いために夜の空に單に星（實は巨星のみ）が見えてゐる

るから晴天と観測し、實は卷雲の襲來を知らないで天氣豫報を誤まる場合は少なくない。

近時の歐州戦争に於いて軍人一般に此の星座の智識が飛行船襲來の認識に頗る重要視されたと聞く。いかにも、大きな圖體の飛行船ならば暗夜に飛ぶのを地上から判斷するのに、星の見えかくれによつて判斷するのは尤もな方法と言はねばならぬ。

個々の星を呼ぶのに星座の名を冠しないで、星表番號を用ふることが多くなつて來たことは前にも一言した通りである。特に今こゝに星表の中で屢々用ひられるものゝ數種を挙げやう。

第一はボン星表(Bonner Durchmusterung 略してB.D.)である。此の星表は(以下皆同様であるが)星が總て幅一度づゝの赤緯帶に其れづゝ一括されて赤經順に記載されてある。故に例へば

B.D. + 18.2531

とあるのは「ボン星表の赤緯第十八度の帶の第二五三一番星」といふ意味である。これだけの記載では唯其の星の赤緯が略々分かるといふだけで、赤經は之れだけでは殆んど不明であり、従つて何の星座に屬するのかわいふことも殆んど分らぬ(特に熟練した人を除いては)。誠に無味乾燥な言ひ表はし方であるが、何しろ幾十萬といふ多數の星を比較的簡單に、又一様の様式で言ひ表はさうとすれば止むを得

ない。實際恁んな場合には星座の如何は問題で無いのである。

次に又 C.D. — 36.15627

は南米コルドバ星表(Cordoba Durchmusterung)の赤緯南三十六度帶の第一五六二七星

C. P. D. — 72.2757

は南亞喜望峯寫真星表(Cape Photographic Durchmusterung)の赤緯南七十二度帶の第二七五七星

尚又世界各國の天文臺が數十箇所聯合して組織せる天文協會(Astronomische Gesellschaft)の一事業として、一八八三年以來一定の約束の下に着手した星表作製部の出版物としてA. C. Catalog(Astronomische Gesellschafts Katalogの略)なるものを出してゐるが、之れに依れば各天文臺が各々或る赤緯帶だけを分擔してゐるため次の様な書き方をする。

A. G. Albany 5901

即ちオルバニー天文臺分擔の表の第五九〇一番星

しかし、尚又變光星、二重星、星雲、星團等にはそれゝ特別な星表があつて其の番號を用ひることが普通であるし、更に光度を重なる目的として作製したハーヴァード光度星表(Harvard Photometry 略してH. P. 及び Harvard Revised Photometry 略してH. R.)や、ポツダム光度星表(Potsdamer Photometrische Durchmusterung 略してP. D.)などの記載番號を呼ぶこともある。(終)